

幻の古茂山

絵垣七郎

(会員 佐伯市池田下久部)

戦いの日々の記憶も遙かに流れ去り、私もいつしか還暦を過ぎたが、今でも兄が元気で帰ってきた夢を見る。ハッキリと長く意識に残る夢で、夜半の覚めやらぬうつつの間、あれは夢ではなく現実だったのではなからうかと疑う。

兄が満州ハイラルの部隊で終戦を迎え、ソ連軍により北鮮に送られて抑留中、古茂山コモガのソ連病院で死亡したのが昭和二十一年九月十四日である。

悲惨だった太平洋戦争も終り、母は朝夕神仏に祈りながら兄の帰りを待っていた。

外地からの復員もようやくしげくなつた頃、私は兄と同じ部隊だった人が兄の死を語つたとの噂を聞き、すぐ

に隣村のその人を訪ねた。

まだ復員したばかりで顔色も青白く目が落ちくぼんだその人は、私を迎えて当惑したような様子で、兄の死については当時の収容所が混雑しており、みな痩せ細つて人相が変わつていたので、兄かどうか確認できたわけでもなく、確かなことはわからないと、目をそらしながら言葉を濁した。

しかし、私はその表情や語り方から兄の死がまぎれもない事実であることを感じとつていた。力なく帰つた私は、母の顔を見るのがつらかつた。兄の生存を疑わず、帰つたら学校に行かせてやると言つて励みにしている母にそれを告げるにしのびず、悶々の日を送つていた。

しかし、遂にかくしきれぬ時が来た。兄戦病死の公報が来たのである。

昭和二十二年の晩春、田植えの準備をしていた私は、使いの者から兄戦病死の公報を聞かされ、行き会う村人への会釈もうとましく、急いで家に帰つた。

目を赤く泣き腫らした母が仏壇の前に座つていた。私は言うべき言葉を知らなかつた。

戦死との噂は聞けど帰るかど

奇跡たのみしに公報きたりぬ

やがて市から遺骨を受け取るようにとの通知を受けた。

青年期にさしかかっていた私は、大事に伸ばした髪を丸坊主に刈り、兄の遺骨を首にかけて帰り、母の待つ座敷の仏壇に安置した。

夢だにも 遺骨となりて帰るとは

思わざりしにと 母泣き給う

箱の中には、兄の名前を書いた位牌が入っているだけであった。

遠い異国の地で、肉親の温かい介抱を受けることもなくさびしく死んでいった兄を、私は自分の軍隊生活の経験と重ね合せて、その心情をおしはかり慟哭した。

いくさ果て 異郷に逝きしわが兄の

無念思えば眠り難しも

(前記三首の拙い歌は、当時私とその折々に詠んだものである)。

十人兄弟の末っ子で育った私は、意気地がなく頼りない子どもであった。

そんな弟が子科練を志願して一足先に入隊するのを、兄と父は駅のプラットホームまで来て、沈痛な面もちで見送ってくれた。その面影は、今でも鮮明にまぶたに焼き付いて離れない。

思えばあの朝が兄とも父とも今生の別れであった。私が十五才、兄は十九才であつたらうか。その兄もやがて徴兵で都城の部隊に入隊し、すぐに満州へと送られた。その途上、鎧戸で閉ざされた軍用列車の中から、このあたりが佐伯であろうと思ひ、父母や故郷を伏し拝んで通つたという便りがあつたと、復員後母から聞いた。

思いやりのある元気ものだった兄が、如何なる運命ならば帰国の日を夢にまで見ながら、異国の収容所で人相の変る程に瘦せ衰えて息絶え、捨てられるように埋められたのであろうかと思ふ。

知らぬ異郷の夕暮れの養の河原で、兄も幼な子たちと同じように、肉親や故郷を恋うていっているのではなからうか。

この四十数年の間、わが夢路に帰ってくる兄への思いは、年を重ねると共に深まってゆく。兄とは幼い時から同じ蒲団で身を寄せ合って眠った仲で兄弟の絆も強く、このまま終るにはあまりにも切なくしのびない。

今に至っては遺骨を探す術もないが、いつの日か兄終焉の地を訪れて霊を慰さめ、その無念の情をいささかなりとも晴らしてやることをわが終生の願いとして、まだ見ぬ古茂山の空へ遠く思いを馳せるのである。

(平成二年九月 記)



秋の県外1泊研修旅行案内

日 時 10月15日(金)・16日(土)
行き先 佐賀・松浦・平戸・佐世保方面
1日目 佐賀県立博物館・松浦史料博物館ほか
2日目 平戸の中世史跡めぐり・佐世保自衛隊資料館
申し込み 小野 46-0445または
46-0364 五十川まで
期 日 10月5日
募集人員 25名